

東書

最新

全訳

古語辞典

授業から大学入試まで、

古典学習に必要な情報が満載。

古典の世界を深め、見やすく分かりやすい最新刊！



編集委員

三角洋一

小町谷照彦

2色刷

B6変型判・五三六ページ

総収録語数約二三、〇〇〇

定価二、八六〇円(本体二、六〇〇円)

ISBN 4-427-39500-9

東京書籍

A3641

代表語義欄で  
多義語の意味を一望

こてふらく-こと

こ

豊富な図版で  
ビジュアル面から  
古典を知る

重要語以上は  
二段組の《対訳式》

こてふらく【胡蝶楽】<sup>コトフラク</sup> 舞楽の曲名。四人の子供が背に蝶の羽の形を写したものをつけた衣装を着て、山吹の花をかざして舞う。法会時、のときなどに演じられた。「胡蝶」

こてん【呉天】<sup>コテン</sup> 呉は中国南部にあった国のことで、呉の国が都の長安から遠く隔たっていたことから「遠い異郷。また、遠い旅の空。」こてんに白髪の恨みを重ねるといへども（奥の細道・草加）<sup>コテン</sup> 奥羽地方への旅を思い立って、遠い旅の空で髪の色が白くなってしまふようならぬ思いを重ねるけれども



こてふらく  
(舞楽図屏風より)

【事】名

- ① 行為 動作。
  - ② 行事 行事。仏事。儀式。
  - ③ 仕事 仕事。任務。政務。
  - ④ 出来事 出来事。現象。
  - ⑤ 重大な事。一大事。
  - ⑥ 事情・状況 事情。わけ。
  - ⑦ ようす。ありさま。
  - ⑧ 《食事》 食事。僧の夜食。
  - ⑨ 《形式名詞》 ……すること。
  - ⑩ 《感嘆》 ……ことよ。……ことだなあ。
- 語源的には「言」と同じとされている。「事」と「言」は中古までは混用されている例も見られるが分化していった。一般的に形を備えた物体を表す「もの」に対して、動作・作用・性質、あるいは物どうしの関係などを表す。

① 《漢然とした意味での》行為 動作。ふるまひ

② 「速やかにすべきこと」<sup>コト</sup> 早急にやるべき行為を緩くし、緩くすべき（＝仏道修行をゆるく、りやうって後回しにし）ことを急ぎて

③ 《徒然》 ゆるゆるやるべき行為

- ② 行事。仏事。儀式。  
例「この御子三つになり給ふ年、御袴着のころと」<sup>コト</sup> 《源氏・桐壺》
- ③ 仕事。任務。政務。  
例「我が待つ君がこと終はり帰る龍よりて」<sup>コト</sup> 《万葉・八四二・長歌》
- ④ 出来事。現象。  
例「よごとに、黄金があらなる竹を見つくることかきなりぬ」<sup>コト</sup> 《竹取・かぐや姫の生ひ立ち》
- ⑤ 重大な事。一大事。事件  
例「殿などのおはしまさで、世の中のこと出で来、さわがしうなり」<sup>コト</sup> 《枕草子・殿などのおはしまさで後》
- ⑥ 事情。わけ。意味  
例「いかなることにか、と見えたり」<sup>コト</sup> 《源氏・夕顔》
- ⑦ ようす。ありさま。  
例「あながちなることはなきも」<sup>コト</sup> 《源氏・夕顔》
- ⑧ 食事。僧の夜食。  
例「或る人ことをしておくりたりけるに」<sup>コト</sup> 《著聞集・三〇》
- ⑨ 《形式名詞として用言および助動詞の連体形の下に付いて》《作用・状態などを表して》……すること。  
例「うつくしきことかき」<sup>コト</sup> 《かぐや姫の》かわいらしきことは、このうえ

- ⑩ 《文を「こと」で止めて》《断定の意を強めたり、感嘆の意を表したりして》……ことよ。……ことだなあ。  
例「かの男は、天の逆」<sup>コト</sup> 《例の男は、天の逆手手を打ちてなむのろひ（＝まじないの一種）ををるなる。むくつけきこと打って呪っているとかいうことだ。気味の悪いことだなあ》<sup>コト</sup> 《伊勢・五》
- こと【異】<sup>コト</sup> 《形容動詞の語幹の名詞化》別のもの。違うもの。例「明日になれば、ことをぞ見給ひ合はするとて」《枕草子・清涼殿の丑寅のすみの》<sup>コト</sup> 「あすになったら、《古今和歌集》の別のもの（＝別の本）を（女御が）ご参照になると（天皇は）お考えになって」
- こと【琴】<sup>コト</sup> 《弦楽器の総称。琴・箏・和琴・琵琶など。》<sup>コト</sup> 御前に御ことども召す」《源氏・少女》<sup>コト</sup> 「冷泉の帝は御前に弦楽器をいくつか持つてこさせなさる」<sup>コト</sup> 《口絵・管弦・舞楽》
- ② 特に、十三弦の箏。現在の琴。
- ③ 琴を弾くこと。琴の演奏。例「宮中一の美人、ことの上にておはしける」《平家・六小督》<sup>コト</sup> 「小督は宮中で最高の美人で、琴の演奏の名人でいらっしやった」
- 形動【ナリ】<sup>コト</sup> 「ならなりになりなるなれなれ」
- ③ 【異】（他とは）違っている。異なっている。また、やうに違っている。
- ④ 「衣を着せつる人は、心ことなるなりといふ」<sup>コト</sup> 《天の》羽衣を身に付けさせた（＝着せられた）人、心は、心（地上の人）と違っているようになるのだという」
- ⑤ 【殊】<sup>コト</sup> 格別だ。特別だ。特別にすぐれていること。例「かくことなることな」<sup>コト</sup> 「こういう格別にすぐき人を率えておはして、時めかし給ふこそ」<sup>コト</sup> 《源氏・夕顔》 特別にひいきになさるの

用例は教科書や  
入試問題で頻出の  
作品・場面から選出



# 和歌見出しには 丁寧な解説

たび-とうぐう

たび【旅】(1)家を離れて、一時、よその場所にいること。また、その途上。遠方に限らず、近くの場所に出かける場合もいう。例「都なる荒れたる家にひとり寝ばたびにまさりて苦しかるべし」(万葉集・四〇〇)。「都にある荒れたわが家にひとり寝たら、旅(たび)をしてひとり寝る」ともまじって、いっそうつらいこととあろう。例「暮らして文化」(庶民と旅)。

たびにやんで…【俳句】(1)旅に病んで。夢は枯れ野を(かけ廻る)。(2)発句。日記。芭蕉(1)。「旅中病に倒れ、夢でなおあちこちの枯野を駆けめぐっている」(季冬・枯野)。(2)元禄七(一六九四)年十月八日、死の四日前の作。「病中吟」と前書き。「発句日記」には、支考に「なほかけ巡る夢心」とするのとどちらがよいかと推敲を重ねていたようすなどが記されている。これが芭蕉最後の句となった。

東海道中膝栗毛(1)【小説】(1)「書名」江戸時代後期の滑稽小説。八編十八冊。十返舎一九(1780)年(1802)年から文化六(1809)年にかけて刊行。江戸の町人弥次郎兵衛(喜多八)を主人公に江戸から伊勢・奈良・京都・大坂に至るまでの道中記。途中の二人の滑稽で愚かな失敗談を中心に、折々の狂歌、各地の風俗、方言などが軽妙に描かれている。好評を博し、金比羅宮島参詣(1)をしてから江戸に帰るまでの続編が書き継がれた。(2)刊行年を文化九(1812)年まで、あるいは文化十一(1814)年までとする説もある。(3)「暮らしと文化」(庶民と旅)八九頁。

東海道四谷怪談(1)【小説】(1)「演目」江戸時代後期の歌舞伎脚本。世話物。五幕。四世鶴屋南北(1)作。文政八(1825)年、江戸中村座で初演。南北怪談物の代表作。「四谷怪談」ともいう。(2)歌舞伎鑑賞「東海道四谷怪談」。

とうぐう(1)【等覚】(1)仏の異称。(2)修行によって菩薩(1)が到達する最高の位(1)。(3)「修行」。

東関紀行(1)【書名】(1)「現」東関紀行(とうぐうんぎかう)。(2)「修」同じ志をもつて仏道の修行に励む人。特に、浄土真宗で信徒のこと。(3)「修」。

現代仮名見出しで  
探したい語も  
すぐ見つかる

た

## 歌舞伎鑑賞

東海道四谷怪談(1)【小説】(1)「書名」怪談好きの歌舞伎狂言作者鶴屋南北(1)の集大成作品。日本の代表的な怪談物である。初演は文政八(1825)年江戸中村座。お岩が幽霊となってたるといのがおおかまなストーリーだが、歌舞伎を見ると、その原因や背景、世界の深さに驚かされる。一人の役者が三役を早替わりで演じたり、髪梳き、戸板返し、仏壇返し、提灯を抜けないなどの舞台上の仕掛けは、芝居の楽しさを教えてくれる。同時に人生の光と闇とを克明に描き出して見せてくれるあたり、歌舞伎ならではの醍醐味(1)である。読むよりも見るほうが断然おもしろい作品の代表。

とうぐう(1)【東宮・春宮】(1)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)「かくて、あて宮、とうぐうにまゐり給ふ事、十月五日とさだまりぬ」(宇津保・あて宮)。「このようにして、あて宮が、東宮に参上なさることは、十月五日と決定した」。(2)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)。

とうぐう(1)【東宮・春宮】(1)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)「かくて、あて宮、とうぐうにまゐり給ふ事、十月五日とさだまりぬ」(宇津保・あて宮)。「このようにして、あて宮が、東宮に参上なさることは、十月五日と決定した」。(2)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)。

とうぐう(1)【東宮・春宮】(1)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)「かくて、あて宮、とうぐうにまゐり給ふ事、十月五日とさだまりぬ」(宇津保・あて宮)。「このようにして、あて宮が、東宮に参上なさることは、十月五日と決定した」。(2)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)。

とうぐう(1)【東宮・春宮】(1)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)「かくて、あて宮、とうぐうにまゐり給ふ事、十月五日とさだまりぬ」(宇津保・あて宮)。「このようにして、あて宮が、東宮に参上なさることは、十月五日と決定した」。(2)皇太子の御殿。「春まの宮」(1)。

参考 情報で  
知識を深める

## 暮らしと文化

庶民と旅(1)【書名】(1)鎌倉時代ごろから、旅はある程度安全にできるものになってきたといわれる。「十六夜日記(1)」を書いた阿仏尼(1)が旅をしたのは六十歳(あるいは七十歳説もあり)だったとされており、高齢の女性が困難を伴いながらも京都から鎌倉へ無事に行くことができたのである。(2)江戸時代になると、さまざまな旅の形態が出てくる。その多くは生活や仕事のためのもので、それらについて書かれた紀行文が多く残されている。例えば武士が勤務のために地方をめぐって記録を取るといったものがあり、調査・研究的な性格を合わせつつものもある。一方、温泉に療養のために滞在し、その間の病状の回復や土地の人々との交流を記したのものもある。また花見も一つの小さな旅で、花見に関する紀行文も多数残されている。(3)信仰と結びついた旅もあった。お伊勢参り、善光寺参り、西国三十三所参り、金比羅参りなどで、これらは庶民が一生に一度は行きたいという願いのこもった旅であった。(4)こうした信仰の旅はしばしば講という組織を通して行われた。講は町内や村内の信仰者のグループで、日常的に信仰行事を行うほか、積立金をし講仲間の代表者たちが寺社参詣の旅に出た。

江戸時代も終わりになると、庶民の旅はかなりポピュラーなものになった。「東海道中膝栗毛(1)」はそうした読者の興味を反映して、各地の名物や食べ物などをふんだんに紹介している。

江戸時代も終わりになると、庶民の旅はかなりポピュラーなものになった。「東海道中膝栗毛(1)」はそうした読者の興味を反映して、各地の名物や食べ物などをふんだんに紹介している。

江戸時代も終わりになると、庶民の旅はかなりポピュラーなものになった。「東海道中膝栗毛(1)」はそうした読者の興味を反映して、各地の名物や食べ物などをふんだんに紹介している。

江戸時代も終わりになると、庶民の旅はかなりポピュラーなものになった。「東海道中膝栗毛(1)」はそうした読者の興味を反映して、各地の名物や食べ物などをふんだんに紹介している。



『東海道中膝栗毛』の挿絵

上代から近世まで  
幅広いコラム  
暮らしと文化

八一九

本文組見本 (125%拡大)  
この見本ページは複数箇所からの抜粋により構成されております。

歌舞伎の世界を  
紹介する  
歌舞伎鑑賞



## ◆《対訳式》で読みやすい

学習用古語辞典として初めて、上下二段組の《対訳式》を採用。前後の文脈がよくわかり、語の使われ方が理解しやすくなっています。  
また、例文は教科書・入試問題でも頻出の箇所から選び、丁寧な逐語訳にしました。

## ◆代表語義欄が読みやすい

見出し語の種類を重要度別に三種類に分け、最重要語については、複数の語義を一望できるように「代表語義欄」を設けました。  
また、その語の成り立ち、語源や語義の変遷などの学習に役立つ情報を示しました。

<p><b>例</b> 「女御<small>に</small>、更衣<small>が</small>あまたさぶらひ給ひける中に」 〈源氏・桐壺〉</p>	<p><b>訳</b> 「女御、更衣が大勢お仕え申し上げていらっしやった中で」</p>
<p><b>例</b> 「物語のおほくさぶらふなる、あるかぎり見せ給へ」 〈更級〉</p>	<p><b>訳</b> 「(京には)物語がたくさんありますと聞いていますが、(それらを)全部見せてください」</p>
<p><b>例</b> 「鳥<small>が</small>の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし」 〈枕草子・春はあけぼの〉</p>	<p><b>訳</b> 「鳥が寝床へ帰るために、三羽四羽、二羽三羽など(かたまつて)飛び急ぐようすでさえ風情がある。まして、雁などの連なったのが、たいへん小さく見えているのほとても趣深い」</p>

▲本文607頁より

**めす**

【見す・看す】 【見す・看す・召す】(きしんす・せせ)

《見る》ご覧になる。	↓	他	①
《治める》お治めになる。	↓	他	②
《召す》【呼ぶ】お呼びになる。	↓	他	①
《取り寄せる》お取り寄せになる。	↓	他	②
《飲食・着用》			
召し上がる。お召しになる。	↓	他	③
《任命》任命なさる。	↓	他	④
《乗り物》お乗りになる。	↓	自	

▽動詞「見る」の未然形に、上代の尊敬の助動詞「す」(四段活用)の付いた「見す」が一語に変化した語。(呼び寄せて)ご覧になる意から、呼び寄せる意の尊敬語「召す」に転じた。

▲本文1263頁より

## ◆ 文法解説がわかりやすい

古典学習において特に重要な、助動詞の文法解説については、活用と活用形を見出し語冒頭に活用表で掲載。また、付録（「まぎらわしい語句の識別」）や見返し（「助動詞活用表」）など、つまずきがちな文法事項を目につきやすく、学習しやすいような工夫をこらしました。

### き

〔助動〕「特殊型」  
《接続》原則として活用語の連用形に付く。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(せ)	○	き	し	しか	○

ただし、カ変・サ変動詞には特殊な接続をする。

カ変 「く(来)」	未然形「こ」	連用形「ぎ」
	こし・こしか	きし・きしか
サ変 「す(為)」	未然形「せ」	連用形「し」
	せし・せしか	しき

### まほし

〔助動〕「シク型」  
《接続》動詞や助動詞「る」「らる」「す」「さす」「しむ」などの未然形に付く。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(まほしく)	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○
まほしから	まほしかり		まほしかる		

▲本文1197頁より

▲本文401頁より

## ◆ バックアップ機能でわかりやすい

多くの見出し語の中から、関連する情報が確実に得られるさまざまな送り表記を入れました。また、参考情報では、語義の解説だけではわからないことばの使用法なども解説しました。

### ● 初学者に使いやすい「現代仮名見出し」「空見出し」

かわす【交わす】(現) ⇓ かはす  
かわず【蛙】(現) ⇓ かはづ  
河竹黙阿弥 モクアミ【人名】(現) ⇓ 河竹黙阿弥(かはたけもくあみ)  
かわたれどき【彼は誰時】(現) ⇓ かはたれどき  
河内 カワチ【旧国名】(現) ⇓ 河内(かはち)

### ● 関連する見出し語がすぐにわかる「参照送り」

おほくらーしゃう【大蔵省】シヨウウラ【律令制で、八省の一つ。諸国から納められる租税の出納や銭貨・度量衡りやうりやう・売買価格などの事務を行った。「大蔵省おほくらの省しやう】「大蔵省」 ⇓ はっしやう(八省)

### ● ことばの説明だけにとどまらず「参考情報」

しやういでん【昇殿】ノボリ【「サ変」平安時代以降、清凉殿せいりやうにある殿上でんじやうとの間にのぼることを許されること。例「大内だいないの守護しゆごにて年久としひさしうありしかども、しやういでんをば許されず」(平家・四・鶴)】「源頼政げんらいせい訪は」宮中守護職として長年勤めていたが、昇殿を許されなかった。【参考】昇殿が許されたのは、五位以上の中から家柄などで選ばれた者と六位の藏人ざうじんである。このうちの三位さんゐ以上の者と四位よゐの参議さんぎを「上達部じやうたつぶ」と称した。昇殿を許されない者は「地下ちか」と呼ばれ、殿上人との社会的地位の差は大きかった。

▲本文688頁より

▲本文273頁より

▲本文397頁より



### ◆ 古典の世界を広げる見出し語 二万三千語

学習に必須の見出し語に加え、地名・人名や、和歌・俳句などの固有名詞、また歌舞伎・浄瑠璃演目など、これまでにないさまざまなジャンルのことばを収録しました。

### ◆ 「主要作品解説」で 重要な作品の世界をつかむ

古典文学の中で特に重要とされる作品二十三作品と、作者三人について、それぞれあらずじや成立の背景などを詳しく解説しました。授業では一部分しか扱わない有名作品の全体をつかむことができます。

#### ● 見出し語の例

【地名・歌枕】

明石の浦／香炉峰／清水／住吉／檜の小川／日光街道

【人名・作中人物名】

新井白石／柿本人麻呂／空海／竹田出雲／小野小町  
源頼朝／かぐや姫／光源氏／葵上／世之介

【作品・演目名】

浮世風呂／義経記／後拾遺和歌集／西鶴大矢数／夜の寝覚  
仮名手本忠臣蔵／国性爺合戦／出世景清／義経千本桜

#### ● 「主要作品解説」に収録されている作品例

古事記／万葉集／古今和歌集／蜻蛉日記／源氏物語  
枕草子／平家物語／風姿花伝／奥の細道／雨月物語



▲本文1443頁より

# ◆ 豊富なコラムで古典の世界の知識を深める

古典の世界をもっと深め、もっと楽しむために、コラムを豊富に掲載しました。

◆身近な古典芸能のひとつである歌舞伎について、

有名作品十六作品の戯曲を解説・鑑賞したコラム **歌舞伎鑑賞**

## 歌舞伎鑑賞

### 恋飛脚大和往来(まどわらい)

寛政八(一七九六)年大坂で初演された歌舞伎芝居だが、原作は近松門左衛門作『冥途(みやと)の飛脚』を改作した菅専助(すがせんすけ)作『けいせい恋飛脚』。人形浄瑠璃(じやうるり)の戯曲である。主人公の忠兵衛は現金や手紙を運ぶ飛脚屋。遊女梅川(うめがわ)と深い仲の忠兵衛は、梅川が他の客に身請けされると聞き、友人の八右衛門から金を借り手付の金を打ったものの、残金のめどが立たない。そのうえ八右衛門に、廓(か)で借金のことをさんざんに言い散らされ、かつとなった忠兵衛は、ふところを持っていた武家屋敷に届ける三百兩の封印を切ってしまう。封印を切れば、公金横領の罪で死罪は免れない。恋ゆえに身を滅ぼす男の刹那(せつな)。ここは興奮して思わず封印が切れる型と、男の意地から自分で切る型の二種類の演出があり、見せ場の一つとなっている。男女の愛を柔らかな写真芸で見せる上方和事(わじ)の代表的な芝居である。忠兵衛と八右衛門の言い争いは深刻でありながら笑いを誘う場面展開で、歌舞伎独特の上等な演出法である。

▲本文551頁より

◆上代から近世まで、幅広く興味深い記事を満載した **コラム 暮らしと文化**

## 暮らしと文化

### 橘(たちばな)の花散る里のほととぎす

夏を代表する鳥であるほととぎすは『万葉集』の時代から数多く歌に詠まれ、さまざまなイメージを伴うものとなった。多情で居所が定まらない、もの思いや思慕の情をかきたてる、懐日の念を起こさせる、といったものがそれである。鳴き声については陰暦五月になると人里に飛来し「こずえ高く鳴く、曉(あけ)や五月雨(ごご)の深更に鳴く、血を吐くほど声をふりしほって鳴く、冥途(みやと)に往来し』しでのたをさ(諸説あるが、「死出の田長」と解されることが多い)と鳴く、などとされる。また、ほととぎすはしばしば橘の花、卯の花、藤の花と取り合わせて詠まれ、『古今和歌集』に「時鳥(ときどり)我とはなしに卯の花の憂き世の中に鳴きわたるらむ」(夏・云・凡河内躬恒、「我が宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ」(夏・三言・詠み人知らず)などがある。

『源氏物語』花散里(はなぢり)巻には、次の場面がある。須磨(すま)への退居を控えた光源氏はつかの間の平穩を求めて、かつて淡い愛情を交わした花散里を訪問しようとする。そして五月雨の晴れ間に、故桐壺(きとう)帝に仕えた麗景殿(れいけい)の女御(にみよ)邸におもむき、その妹君の花散里と対面する。折しも往時をしのばせるほととぎすが飛来し、香り高い橘の花の木で鳴いた。光源氏は「橘の香を懐かしみ時鳥花散る里をたづねてぞ訪(と)ふ」(昔の人を思い出させる橘の香りに心ひかれて、ほととぎすの私はその花の散るこの邸を探して訪ねて来た」と女御に詠みかけた。それに対し、女御は「人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ」(訪れる人もなく荒れ果てたこの邸は、軒端に咲く橘の花だけが、昔をしのぶほととぎすのあなたを誘い出すよすがとなった)と返す。光源氏の歌は、『古今和歌集』の「五月(ごご)待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(夏・三言・詠み人知らず)や、『万葉集』の「橘の花散る里の時鳥片恋しつづ鳴く日しそ多き」(八・四言・大伴旅人)をふまえたものである。

▲本文1160頁より

## 暮らしと文化

### 蹴鞠(けまり)

蹴鞠は貴族が好んだみやびな遊戯。中国伝来とされ、延喜から天曆のころ(十世紀前半から中葉)に普及した。柳・桜・楓などを四隅に植えた「懸かり」という専用コートの中で、八人の「鞠足(まりあし)」(「蹴技者」が技を競った。

松の根元にいる蹴技者「上鞠(かみまり)」が、三度けり上げてから最初のパスを出す。その後、鞠を落とさず何回パスが続くかを競った。「懸かり」の周囲には、「見証(みあかし)」(審判員)が数人いて、独特の節回しで回数を数えた。千点を最高点としたが、五百を越えることはほとんどなかったらしい。「アリ」「ヤ」「オウ」などのかけ声とともに鞠をける際、腰や膝を曲げず、端正優雅な姿であることも求められた。鞠は鹿革(か)で作り、直径二十センチ程度であった。『徒然草』一七七段には、降雨の後の「懸かり」に、おがくずや乾いた砂をまいたことが記されている。

蹴鞠の歴史の中で名人も出現した。『古今著聞集』(一〇九七)「一五九」は、「懸の下に立つこと七千日」及び、病気でふせっているときも、足には鞠を当てていた。また、ある時、鞠を高くけり上げたら雲の中に入り、そのまま見えなくなってしまうとも語られている。

こうした成通の超人的な蹴鞠の力量に、鞠の精霊も感服のあまり、その姿(顔は人間の児童のよう)で、手足は猿)を現したという。『源氏物語』若菜上巻で、柏木が女三の宮の姿を見たのは、光源氏の邸宅六条院で蹴鞠をしているときであった。柏木の蹴鞠の技量については、「足もとに並ぶ人なかりけり」と書かれている。現在では、毎年一月四日、京都下鴨神社で「蹴鞠初め」が奉納されている。

本文▶ 495頁より

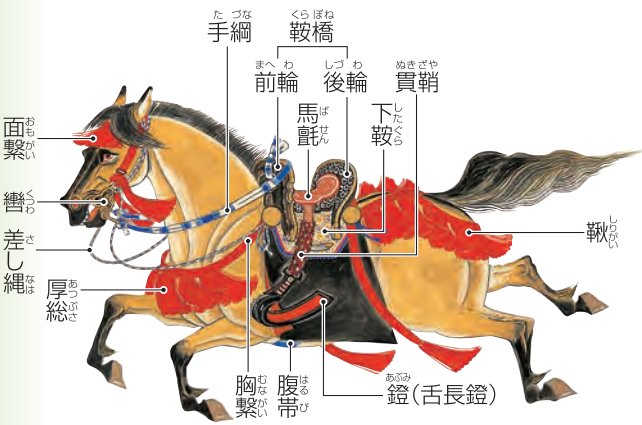


# 美しい写真で視覚から古典を学ぶ

カラー口絵は類書中最多級の三十二ページ。  
ビジュアルから古典の世界に引き込まれます。



▲口絵「中古の装束(男性)(女性)」より



▲口絵「乗り物」より



五節  
陵王 (童舞)



迎陵頻 (鳥の舞)



青海波

▲口絵「管弦・舞楽」より

その他「動植物」「建築」「年中行事」「調度」「能・狂言」など、資料性の高い写真・図が満載です。

編集委員・執筆者一覧

■編集委員

三角洋一

(大正大学特命教授・東京大学名誉教授)

小町谷照彦

(東京学芸大学名誉教授)

■校閲委員

兼築信行

(早稲田大学文学学術院教授)

嶋中道則

(東京学芸大学教授)

徳田和夫

(学習院女子大学教授)

矢田勉

(大阪大学大学院准教授)

■執筆者

伊藤一男・岡田徹・形部光昭

北川真理・倉島利仁・黒石陽子

小町谷照彦・櫻井優行

嶋中道則・鈴木健一・須藤敬

宗我部義則・滝口悦郎

田口章子・田辺重右衛門

林精一・平賀徹・福島公彦

藤井克憲・藤岡まや子

船崎多恵子・本間正幸

三角洋一・村田勇司・安田吉人

山口仲美・吉田茂